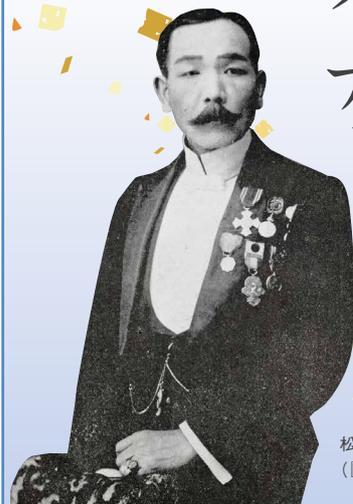


世界の

エンターテイナー、

松旭齋天一

しょうきよくさいてんいち



松旭齋天一肖像
〔「福井県の華」より〕

明 治時代に世界を舞台に活躍したマジシャン松旭齋天一。天一は、嘉永6（1853）年、福井藩士の家来の子として福井城下に生まれ、一家で四国に渡り寺で育ちました。幼いころから人を驚かすことが大好きで、悪戯を繰り返し、15歳の時に寺を追い出され旅芸人になります。

天一は、生まれつきの才能を活かします。剣渡り、落語、手品などの芸を見よう見まねで披露していましたが、和歌山の興行で大きな失敗をします。興行主のにせられて一度も挑戦したことのない「火渡り」に即

興で挑むことになり、あまりの熱さに途中で気絶し、全治3か月の火傷を負うことになったのです。これがきっかけとなり、天一は秘法や手品のタネを研究し、完全に自分のものとしてから芸を披露するようになりました。

天一は一座を結成して、明治13（1880）年、28歳の時に大阪で旗揚げ興行をし、明治21（1888）年、35歳の時に満を持して東京の大劇場で興行を始めます。実は、このスターとなる第一歩となった東京の興行前に、天一は「一大奇術」を演

じています。当時、東京では劇場での奇術興行が認められていませんでした。奇術は歌舞伎やその他の芸と比べて低く見られていたのです。一流の劇場で興行したいと念願していた天一は、劇場であった「文楽座」を「文楽亭」と一字変えて寄席として警察から許可を得たのです。この興行は空前の大ヒットを記録。東京の大劇場で奇術を演ずるという天一の先見性がスターの座を射止めたのです。

天一の人気は欧米にも広がります。明治34（1901）年から実施したアメリカなどにおける海外巡業を大成功に収めます。帰国後、明治38（1905）年に東京・歌舞伎座で興行を行い話題になります。外国で学んだ新奇術により再び日本で大人気になったのです。天一がこれほどまで人気を博した秘密の一つは、ダイナミックな劇場型のマジックを



明治43（1910）年、(東京市)新富座公演でのポスター
（河合勝マジックコレクションより）

生み出したことです。明治期の奇術師は落語家組織に所属しており、手品は寄席で演じられる程度でしたが、天一は、独自の演出を加えた水芸や大掛かりで斬新な舞台奇術を作り上げ、エンターテインメントに高めたのです。

こうした数々の功績により今や松旭齋天一は「日本近代奇術の祖」と称されています。現代のマジシャンにつながる多数の弟子を輩出し、天一の「天」の字は現在のイリュージョニストのルーツにもなっています。

関連史料・ゆかりの地

松旭齋天一のふるさと福井への贈り物

天一が寄進した藤島神社境内の石灯籠



天一は名声を得てからも何度か福井で凱旋公演を行っています。故郷を思う天一は度々貧しい人に金品を贈ったり、神社やお寺に寄付していました。藤島神社境内にある石灯籠も天一が寄進したものです。

【住所】
福井市毛矢3-8-21
（JR福井駅より京福バス赤十字病院行き「不動山口」下車徒歩5分）